

令和6年度 香川県立農業大学校 学校評価

評価基準 A：十分達成できている、B：おおむね達成できている、C：どちらかというと達成できていない、D：ほとんど達成できていない

重点目標	評価項目	具体的方策・評価指標等	経過・実績	評価	次年度の課題と改善策	外部評価委員の意見
I 学生の確保	1 学生・研修生の応募者確保	●具体的方策 1 高校生及び高校の進路指導教諭への積極的な働きかけ ・分かりやすい学校案内・刷新した募集要項等の作成・配布 ・体験型オープンキャンパスの複数回実施と参加誘導 ・高校訪問の実施と進路指導担当者を対象とした学校説明会の開催 ・高校進路ガイダンスへの積極的な出席 ・入学試験の実施時期の検討と入学予定者の確保 ・高校への出前授業の実施	・5年度に作成した学校案内と受験日程を大きく見直し作成した募集要項とともに県内高校、市町、JA等に配布した。 ・体験型オープンキャンパスを7回計画し、実施済みの6回（延べ参加者83名、うち学生52名）と受験者向け説明会を1回（参加者23名うち受験年齢到達者20名）の参加があった。体験型オープンキャンパスは、専攻コースごとに実施し、複数回参加することで、受験予定者が専攻コース選択の機会を提供できた。 ・農業高校5校を訪問し、校長及び進路指導担当職員と卒業生の状況や各校の進学等の状況について意見交換を行い、学生募集を行った。また、進路指導担当者を対象とした学校説明会では、5校の参加があり、学校紹介及び受験案内を行うとともに学生の受験を促すよう依頼した。 ・県内3校で実施された進路ガイダンス（延べ5回）に参加し、農大の特徴や卒業後の進路等について情報提供した。 ・早期に学生を確保するため、推薦入試を1カ月前倒しして9月に、一般前期入試を2カ月前倒して11月に実施した。また、一般後期入試を可能な限り後ろ倒しして、農大が最終の選択肢になるよう実施時期を3月に変更した。 ・石田高校において、米麦に関する出前授業を1月に実施した。	B	・引き続き体験型のオープンキャンパスの複数回実施を継続して行うが、令和6年度の実施状況を踏まえ、効率的な実施方法に見直す。 ・令和6年度は、試験的に入学試験時期を変更し、受験者数が近年にない少数となったが、試験実施時期だけの問題でないと考えられ、次年度も同時期に入学試験を実施する。 ・これまで、コロナ明けから実施してきた体験型オープンキャンパスに参加していた受験年齢未達成者が確実に受験に結び付くような働きかけを検討する。 ・農業高校以外の高校生が農業大学校を訪れるような機会を設けるとともに、中学校とも連携を図り、農作業体験の支援や研修の受入れなど、連携できる方法を検討する。	・県内の農業高等学校も志願者数は減少傾向にある。また、企業等からの求人数も多い。 ・受験生が体験できるオープンキャンパスが数多くある方が良いのではないかな。 ・少子化も影響しているが、高校生の就職、進学の動向を調査すれば応募者数を増やす工夫の余地が残っているのではないかな。
		2 情報発信の強化 ・ホームページの充実と学校の出来事などの積極的な情報発信 ・SNSを活用した情報発信の充実 ・県広報誌や広報媒体を活用した学生・研修生募集記事の掲載	・情報発信委員会を中心にホームページの充実や積極的な情報発信に努めた。農大のできごとについて年間計画を作成し、定期的な情報発信を進め、農大のできごとについては、月2回超のペースで投稿した。 ・農大のSNSだけでなく、農業経営課のSNSも活用し情報発信を行った。また、学生からの投稿も促した。（Facebook・Instagramの投稿73件、うち学生の投稿8件） ・学生・研修生の募集について、農大ホームページや県・市町・JA広報誌への掲載、公共施設（体育館等）等へのポスター掲示を行った。 ・卒業論文発表会や有機農業研修会などの学校行事について報道提供し、マスコミを通じた広報を行った。	A	・情報発信委員会でさらにホームページの充実や積極的な情報発信の方法等の協議を進め、充実した情報発信に努める。 ・研修会の動画等をアップし、視聴してもらうことで農業大学校をPRする。 ・学校行事や小学生の農業体験など積極的に報道提供し、マスコミを通じた広報を計画的に実施する。	
		3 農業大学校のPRと研修等の応募方法のオンライン化 ・公開講座の実施による開かれた農大のPR ・積極的な研修受入れによる農大のPR	・GAP講義の最終回を著名な実践者を招いた公開講座とし、学生・研修生、学校関係者以外に3名の参加があり、開かれた農大をPRした。 ・高松市の中学校技術科の教員を対象とした研修を受入れ、約20名の教員が野菜の栽培技術の講義を受け、農大の施設を見学した。	A	・農業者に限らず、消費者としての一般県民にも広く関心のある内容の公開講座の実施を検討し、農業大学校を知ってもらい、足を運んでもらう機会を作る。	

重点目標	評価項目	具体的方策・評価指標等	経過・実績	評価	次年度の課題と改善策	外部評価委員の意見																																																				
		4 農業に興味がある社会人への積極的な働きかけ ・農業初心者向け農業基礎講座の開催と準備研修、実践研修への誘導 ・農大見学会（研修科オープンキャンパス）の複数回実施と参加の働きかけ ・受講希望者のニーズに応じた研修内容の検討 ●評価指標 ・オープンキャンパス参加者数 ・担い手養成科応募者数 ・技術研修科応募者数	・昨年度の参加者の意向を踏まえ農業大学校を会場に、7月（サマースクール）と10月（オータムスクール）に農業基礎講座を開催した。7月は土曜日の午後、10月は金曜日の夜間と参加しやすい日程で実施し、7月、10月ともに20名ずつの参加し、野菜等の栽培技術や土づくり、病虫害防除などの基礎を学んだ。 ・研修科オープンキャンパスとして農大見学会を3回実施し、延べ43名が参加した。このうち3名が就農実践研修、3名が就農準備研修に応募した。 オープンキャンパス参加者数 ・担い手養成科 学生75名、父兄等52名（合計127名） ・技術研修科 43名 担い手養成科応募状況 <table><tr><td></td><td></td><td>応募者数</td><td>合格者数</td><td>入学予定者数</td></tr><tr><td></td><td>推薦入試</td><td>16人</td><td>16人</td><td>16人</td></tr><tr><td></td><td>一般入試（前期）</td><td>3人</td><td>3人</td><td>3人</td></tr><tr><td></td><td>一般入試（後期）</td><td>-</td><td>-</td><td>-</td></tr><tr><td></td><td>合 計</td><td>19人</td><td>19人</td><td>19人</td></tr></table> 技術研修科応募状況 <table><tr><td></td><td></td><td>応募者数</td><td>合格者数</td><td>入校（予定）者数</td></tr><tr><td rowspan="3">6年度</td><td>就農実践研修</td><td>10人</td><td>8人</td><td>6人</td></tr><tr><td>就農準備研修Ⅰ期</td><td>19人</td><td>19人</td><td>19人</td></tr><tr><td>就農準備研修Ⅱ期</td><td>17人</td><td>17人</td><td>17人</td></tr><tr><td rowspan="2">7年度</td><td>就農実践研修</td><td>16人</td><td>-</td><td>-</td></tr><tr><td>就農準備研修Ⅰ期</td><td>12人</td><td>-</td><td>-</td></tr></table>			応募者数	合格者数	入学予定者数		推薦入試	16人	16人	16人		一般入試（前期）	3人	3人	3人		一般入試（後期）	-	-	-		合 計	19人	19人	19人			応募者数	合格者数	入校（予定）者数	6年度	就農実践研修	10人	8人	6人	就農準備研修Ⅰ期	19人	19人	19人	就農準備研修Ⅱ期	17人	17人	17人	7年度	就農実践研修	16人	-	-	就農準備研修Ⅰ期	12人	-	-	A	・引き続き農業に関心がある県民に広く門戸を開き、初歩的な講座から実践的な講座へ、対象者の意向にあった研修への誘導を行う。 ・アンケート結果等を踏まえて、受講希望者のニーズに即した研修内容や研修区分の見直しを随時行っていく。	
		応募者数	合格者数	入学予定者数																																																						
	推薦入試	16人	16人	16人																																																						
	一般入試（前期）	3人	3人	3人																																																						
	一般入試（後期）	-	-	-																																																						
	合 計	19人	19人	19人																																																						
		応募者数	合格者数	入校（予定）者数																																																						
6年度	就農実践研修	10人	8人	6人																																																						
	就農準備研修Ⅰ期	19人	19人	19人																																																						
	就農準備研修Ⅱ期	17人	17人	17人																																																						
7年度	就農実践研修	16人	-	-																																																						
	就農準備研修Ⅰ期	12人	-	-																																																						
2 機械、施設等の新規導入等や学生・研修生のニーズに即した環境整備	●具体的方策	1 教育施設や備品等の整備 ・国補事業等による機械、機器の導入及びハウスのリノベーション	・国補事業の農業者キャリアアップ支援事業の取組みにより、懸案であった花き温室のリノベーションを実施し、環境モニタリング機器の導入とともにきめ細かな環境制御が可能な栽培環境を提供することができるようになった。 ・スマート農業、有機農業を学ぶための機械、施設等の導入が可能となり、それらを活用した農業者の学び直しにつながる研修が実施できたとともに、農業大学校で学ぶ学生、研修生の学習環境が向上した。 ・また、堆肥生産や残渣処理に必要なホイルローダーや、拡充した林業・造園緑化コースの実習の充実と安全を図るための高所作業機の導入、現場教室の実習環境改善のためのスポットクレーンを導入した。 ・さらに、老朽化と風害により安全性に問題が生じたブドウ園について、棚の新設が行われ、苗木の定植から安全に学ぶことができる環境を整えることができた。	A A	・国補事業への取組みや予算要求による、施設・備品については引き続き計画的な整備を行い、教育環境の整備を進める。																																																					

[illegible]

重点目標	評価項目	具体的方策・評価指標等	経過・実績	評価	次年度の課題と改善策	外部評価委員の意見
		●評価指標 ・カリキュラムの見直しと新規教科の導入数 ・指導職員の研修参加延べ人数	・造園技術の指導能力向上に資するため、造園技能検定指導者能力向上研修会に職員2名が参加した。 <u>新規教科：3科目　GAP、GAP演習、マネーリテラシー</u> <u>研修参加延べ人数　7名</u>			
	2　実践研修の充実	●具体的方策 1　農場実習や専攻実習での自主的な取組みを促進 ・農場実習等を通じた責任感や指導力の修得 ・生産現場で求められる基礎的な技術・能力の修得 2　校外での実習体験の積極的な推進 ・校外実習等の機会を増やし、人間性・社会性を育成 ・実際の農業生産現場を経験することによる、目的意識や学習意欲の醸成 3　就農や就職に有利な資格の取得促進 ・各種資格試験等の情報提供と積極的な取得支援 ・共通する資格のカリキュラム化と実習時間を活用した専門資格の取得支援 ●評価指標 ・学生・研修生全員の校外実習体験 ・資格取得学生・研修生の延べ人数	・実習において、2年生には1年生への指導や作業計画の説明をさせることなどにより、自主性や責任感の醸成、指導力の修得に努めた。 ・また、野菜園芸コースにおいては、班ごとに栽培品目を割り当て播種から収穫まで班員が責任を持って栽培管理を行い、学生が主体的に作物の栽培管理に関わり栽培技術の修得するよう努めた。 ・2学年の専攻実習については、学生の意向を踏まえて希望する実習先を選択させ、12名が校外（先進農家4名、農業試験場3名、畜産試験場5名）で取り組んだ。 ・1学年の秋に実施していた農家実習を前期と後期の2回実施し、前期、後期各8日間実施し、先進農家等延べ31か所に各1～3名、33名全員を派遣した。 ・就農実践研修生6名全員が希望する品目の先進農家で実習を行った。 ・面談時や資格取得のためのガイダンスにおいて、学生に在学中に取得可能な資格について周知し、資格取得を促した。 ・昨年度に引き続き刈払い機の安全講習を必須資格として授業計画に組み込み、大型特殊自動車免許（農耕者限定）は、実習日に講習が受けられるよう各専攻コースの職員と調整を行った。 ・実習の受入先の選定については、事前に学生・研修生の意向等を把握したうえで調整し、より効果的な実習の実施に努めた。 ・就農・就業後に役立つ資格を中心に、17種類の資格取得に延べ194人（学生155名、研修生39名）がチャレンジした。 <u>校外実習　担い手養成科1年生33名、2年生12名</u> <u>研修科研修生6名</u> <u>資格取得　学生延べ122名　研修生延べ39名</u>	B A A	・作物やほ場の担当者を決め、さらに学生が主体的に栽培管理を行うよう努める。 ・2年生が農場でのリーダーとなり1年生を指導することで、リーダーシップを発揮できるよう仕向ける。 ・要望が高い農業機械の基本的操作については、新たな教科として充実を図る。 ・1年生の農家実習については、引き続き複数の受入先で実習が経験できるよう前期と後期に分け受入れ先の負担とならないよう日数を削減して2回実施する。 ・在学中の積極的な資格取得に向け、引き続き意欲を喚起する。 ・刈払作業従事者安全衛生講習に続き、農大で講習を実施している大型特殊免許（農耕車限定）については、基本的に全員必須の資格として授業計画に組み込む。	・学生の自主性で生産から販売まで取り組ませるのが良い。

重点目標	評価項目	具体的方策・評価指標等	経過・実績	評価	次年度の課題と改善策	外部評価委員の意見
Ⅲ 進路指導の充実と就業意欲の醸成	1 進路決定の指導・支援	●具体的方策 1 個別の進路相談の実施と情報提供 - 三者面談や個別指導による就職活動状況の把握と進路指導 - 関係機関との連携による就職活動の支援や求人情報の把握 2 授業や面談を通じた進路に対する早期動機付け - 修学期間を通じた総合的な進路決定支援 - キャリア教育や「就農・就業ガイダンス」等の実施 - インターンシップや会社説明会への積極的な参加の働きかけ ●評価指標 - 進路決定率 - インターンシップ実施人数	4月下旬に1学年全員に三者懇談を実施し、希望する進路や進路に関する情報共有を図った。2学年においては、授業や専攻コースの職員を通じて進路の希望を把握しその都度情報提供を行った。 - ハローワークやワークサポートかがわと連携し、求人情報の提供や就職活動の支援を行った。 ・就農・就業ガイダンスでは、1学年から農業法人や農業関連企業を知るために、2学年と合同で会社説明会に参加し、社長や人事担当者と面談できる機会を提供し、進路に対する早期動機付けを図った。また、2月には、比較的年齢の近いOBを招いて意見交換を行い、就農、就業に関する具体的なロールモデルを意識付けした。 ・2学年においては、具体的な履歴書の作成方法や先進的農家の講話、農業士会やI F Kなどの農業者組織や農地機構等就農時の相談機関を紹介する授業を行った。 ・<u>進路決定率 進路決定率 100%（卒業予定者26名のうち26名）</u> ・<u>インターンシップ実施人数 5名（のべ人数6名）</u>	A A	1学年の4月と2月の2回実施していた三者懇談を1学年の5月と2学年の4月に実施時期を変更し、指導の継続性と新年度からの就職活動の後押しを行う。 - 新規就農相談センター、JA香川県(アグリワーク)等関係機関との連携を強化し、求人情報の収集と学生への提供に努める。 - 授業や面談を通じて、就職意欲の低い学生への働きかけや選択に迷っている学生への決断をサポートし、早期に各学生が進路の方向性を決められるよう促していく。	進路や就職を指導するため面談時期を早めるなどの検討をしてもよいのではないか。
	2 就農支援	●具体的方策 1 就農を支援する施策の活用促進 - 就農を目指す学生・研修生に対し、各種給付金の事務手続き支援 - 在学中から関係機関との連携強化と就農に向けての各種支援施策等の情報提供と活用支援 2 就農意欲の向上対策 - インターンシップや会社説明会等を活用した雇用就農の支援 - 県内外の優れた農業者による講話を通じた就農意欲の向上	「就農準備資金」については、7月11日に説明会を、また2月12日に税務申告説明会を開催し、手続き等を支援した。現在、学生1名、研修生4名が受給中。 - 今年度拡充された林業・造園緑化コースの学生1名が、林業の担い手育成の国補事業「緑の青年就業準備給付金」を受給中。 - J A香川県就農奨学金を、学生2名が受給。 - 独立自営就農を目指す学生・研修生には、早期に普及センターや市町に相談に行くよう進め、就農に当たっての具体的な準備等指導を受け、円滑な就農に繋がるよう働きかけた。 ・農業法人に就職を希望する学生には、就職先へインターンシップの受け入れを依頼し、職場体験を経てから応募するよう勧めた。延べ6名の学生が4か所のインターンシップを経験し、4名の学生がインターンシップ先に応募し採用された。 ・合同会社説明会（4回）や法人見学会（2回）、先進農家の講話等、先進農家から直接話を聞く機会を増やした。	A A	法人への雇用就農や将来的に独立を希望する学生や研修生については、在学中から各普及センターや新規就農相談センター等との接点を持てるような機会の設定を検討する。 ・インターンシップ制度の活用を促すとともに、農業経営者協議会、新規就農相談センター、関係団体と連携して、学生・研修生と農業法人とのマッチングを円滑に行う。	農業も厳しい環境にあると思うが、農業に興味を持ってもらうための長いスパンの地道な活動に期待する。

重点目標	評価項目	具体的方策・評価指標等	経過・実績	評価	次年度の課題と改善策	外部評価委員の意見
		3 就農相談の実施 ・営農計画の作成支援や関係機関と連携した就農支援活動の実施 ・関係機関（普及センター、農業試験場、農業会議、農地機構等）と連携した就農後の定着に向けた切れ目ない支援 ●評価指標 ・就農を支援する事業の活用者数 ・就農者数	・卒業・修了後に円滑に就農できるよう普及センターや農地機構と連携・情報共有を図った。 <u>就農準備資金活用者数及び進路</u> <u>担い手養成科1学年 1名(親元就農希望)</u> <u>技術研修科研修生 4名(独立就農3、雇用就農1名)</u> <u>緑の青年就業準備給付金活用者数及び進路</u> <u>担い手養成科1学年 1名(親元就業希望)</u> <u>就農者数(担い手養成科)</u> <u>親元就農1名、雇用就農10名(42%)</u> <u>就農者数(技術研修科就農実践研修)</u> <u>自営就農2名、雇用就農1名(67%)</u>	B	・卒業及び研修修了後の着実な就農・定着に向けて在学中から切れ目なく支援できるよう、農業改良普及センター等関係機関とより強力な支援体制の構築を検討する。	・農地機構や普及センターとの効果的な連携方法も模索する必要がある。
	3 就職支援	●具体的方策 1 就職活動の支援 ・就職説明会への参加促進による就職意欲の醸成 ・ハローワーク、ワークサポートかがわとの連携による就職支援 2 就職試験対応の支援 ・模擬面接の実施や履歴書・エントリーシート の書き方指導 ・就職活動に関する専門家の招致による授業と個別指導の実施 ●評価指標 ・就職情報の提供数 ・就職者数(就農以外)	・求人情報コーナーを常設し、学生の希望とマッチする情報は各教授を通じて直接学生へ提供した。 ・求人票を持参して訪問する企業担当者に対しては、できるだけ企業が求める人材や条件を聞き取りし、必要に応じて情報を学生に伝え、進路決定の判断材料を提供した。 ・前年度に引き続き、就農・就業ガイダンスの時間を利用して、2年生全員のハローワークの個別面談を行い、就職を希望する学生のサポートを受けた。 ・学生の希望に応じてオンラインによる個別相談や模擬面接の活用を支援した。 ・エントリーシートや履歴書の書き方、面接試験への対応等について個別対応した。 ・農業以外に就職を希望していた学生には、かがわワークフェアへの参加を促すとともに、1学年には、3月に開催されるかがわワークフェアへの参加を呼びかけ、農大からマイクロバスを準備した。 <u>就職情報提供数 75 社</u> <u>就職者数 12 人(46%)</u>	A A	・無料職業紹介所の機能が発揮できるよう、農業関連企業を中心に農業大学校への求人を積極的に呼びかける。 ・就農及び農業関連企業・団体以外の就職を希望する学生に対しては、ハローワークやワークサポートかがわと連携し、学生の志望する企業の情報提供及び支援を要請する。 ・就職試験対策等のノウハウを持つ機関の協力を得ながら、学生の個性や希望に合ったきめ細かな支援を行う。	